四国大学学際融合研究所年報　第１号　117－127（2020）

研究ノート

阿波おどりとよさこい祭りの比較研究（第１報）

萩原八郎・川村　基

A Comparative Study of Awa Odori and Yosakoi Festivals（First Report）

Hachiro HAGIWARA and Hajime KAWAMURA

抄　録

徳島市の阿波おどりと高知市のよさこい祭りは，歴史の長さでは大きく異なり，踊りのスタイルも違うが，ともに四国を代表する夏祭りで国内外に広く普及していることなど共通点も多い。

徳島市の阿波おどりは，事業を主催していた徳島市観光協会の多額の累積赤字が問題化して以来，運営面で困難な状況が続いている。ここにきて新型コロナウイルス問題で状況はさらに難しくなっている。

徳島市の阿波おどりによって地元に及ぶ経済波及効果は大きい。事業の黒字化にこだわってチケット料金収入を最大化するような動きは，経済弱者を排除することになり，本来庶民が楽しむ祭りとは矛盾するのではないかという疑問がわいてくる。このような疑問に対して，筆者らは，徳島の阿波おどりと並ぶ規模でありながら異なる運営方法をとっている高知のよさこい祭りとの比較検討を行いたいと考え，この第１報は，それぞれの祭りの歴史と概要および両者の特徴や共通点，相違点をまとめることにした。

キーワード：阿波おどり，よさこい祭り，夏の風物詩，興行性

はじめに

徳島市の阿波おどりは400年以上の長い歴史がある一方，高知市のよさこい祭りは戦後に徳島市の阿波おどりを参考に生み出された歴史の浅い祭りであるが，四国の二大夏祭りとしてともに100万人を超える人出を見込む観光の目玉となっている。

徳島市の阿波おどりは，2017（平成29）年度まで徳島新聞社とともに事業を主催してきた徳島市観光協会の約４億円にも上る累積赤字問題により，同協会に代わって2018年度は当時の徳島市長と徳島県商工会議所連合会など７団体の代表による阿波おどり実行委員会が主催した。2019年度からの５年間は興行大手キョードー東京と同社の関連会社キョードーファクトリーおよび徳島のネオビエントの３社の共同事業体に事業委託されている。その１年目（2019年）の阿波おどりは後半の２日間が雨で中止となり，２年目（2020年）の阿波おどりは，新型コロナウイルス問題の影響を受けて４月に中止が発表された。３年目となる2021年の開催に向けては，感染症対策とともに「With コロナ時代」の新常態（ニューノーマル）での開催が模索されている。このような民間の共同事業体への事業委託時には予期していなかった新型コロナウイルス問題の発生と長期化という展開に，共同事業体が負担してきた経費の回収の見込みが立たなくなるという新たな問題も生じている。

民間の共同事業体はこれまで事業の黒字化を目指して様々な改革案を提案してきている。事業委託初年度（2019年）の阿波おどりの事業実績を検証するため，同年９月に弁護士や公認会計士，学識経験者など６名からなる阿波おどり事業評価委員会が設置された。阿波おどり実行委員会から依頼されたチケット関係，演舞場関係，踊り連関連といった検討項目について検証を行い，11月に「阿波おどり事業検証結果についての提言書」が公表されている。また，阿波おどりの事業会計は，インターネットでも公開されている。

近年の徳島市の阿波おどりの運営をめぐっては，とくに事業の黒字化を目指す改革として，おどり連から参加費を徴収する制度の導入や演舞場のチケット料金体系の見直しなどの動きが見られるが，そのような報道を目にするたびに，事業の黒字化という市場原理が祭りの運営に必ずしも良い影響を及ぼしていないのではないかという疑問がわいてくる。このような疑問に対して，筆者らは，徳島の阿波おどりと異なる運営方法をとっている高知のよさこい祭りとの比較検討を行いたいと考えた。本報告はその第１報として，それぞれの祭りの歴史と概要および両者の特徴や共通点，相違点を明らかにすることを目的とする。

東京出身の萩原は，1980年代後半に東京・高円寺の阿波おどりを見てその迫力に強い印象が残った。1990年代前半に徳島の阿波おどりを初めて見たときには，高円寺との違いを意識することはあまりなかったが，再び高円寺の阿波おどりを見学したときにやはり徳島が本場であることをはっきりと意識した覚えがある。現在は徳島ブラジル友好協会の事務局長としてブラジルで活発に活動している阿波おどり「レプレーザ連」と本場徳島との交流に携わっている。高知出身の川村は，よさこい祭りを身近に肌で感じる環境で生まれ育った経験を活かして，この祭りの参加者および運営側からの視点と考えを述べることにする。

なお，本場徳島市の阿波おどりは，「踊り」をひらがなで「おどり」と表記しているため，ここでも「阿波おどり」の表記を用いることにする。

Ⅰ　阿波おどりについて

1-1　阿波おどりの起源について

阿波おどりの由来については，一般的に三大起源説が紹介されている（阿波おどり会館HP参照）。まずは築城起源説で，1586（天正14）年ないしはその翌年に，徳島藩の藩祖・蜂須賀家政が徳島城の築城を記念して，城下の人々に城内での無礼講を許した際に踊られたものを阿波おどりの始まりとする説である。次に盆踊り起源説で，鎌倉時代の念仏踊りから続く先祖供養の踊りを起源とする説である。最後に風流踊り起源説で，戦国末期の勝瑞城で行われていた風流踊りを起源とする説であり，「風流」とは着物や装飾に趣向を凝らしたものを意味する。現在は，盆踊りをベースに「組踊り」「ぞめき踊り」「俄（にわか）」といった民衆芸能の影響を受けながら，それらを貪欲に取り入れ，庶民に支えられながら徳島の伝統芸能として定着してきたものと考えられている。

1-2　戦前までの歩み

江戸期から明治末まで隆盛を誇った阿波藍業をベースとした地域の経済力がその存立基盤となったとされる。阿波おどりに欠かせない鳴り物（楽器）は，今日では鉦（かね），篠笛，三味線，大太鼓，締め太鼓などで構成されるが，一部には高価な楽器もあり，簡単に揃えられるものではない。これらを購入し揃えるためには，藍商人に代表される地域の経済的な背景が重要な役割を果たしたと考えられる。1889（明治22）年の市制施行時，徳島市の人口は全国第10位の６万人余りを擁し，地方屈指の「大都市」となっていた。徳島県内の藍作付面積は明治20年代末にかけて伸長し，1903（明治36）年に１万５千町歩のピークに達した。ところが，明治20年代末からはインド藍の流入が急拡大していたところにドイツからの合成染料の藍の本格的な輸入が始まり，藍産業は急激に衰退していった。地域経済の停滞を打破するために，大正末から昭和初期に商工会議所の主導により，地域振興策として盆踊りの観光資源化が推進されたのである。

1928（昭和３）年８月に商工会議所は「多年沈衰した徳島市の産業界に活気を盛返すのは盆踊りの外にはない」との意見を受けて，盆踊りを大いに奨励することになった。この年から1936（昭和11）年まで，同会議所は警察から盆踊りの催行許可を貰う「願い主」を担い，盆踊りの実質的な主催者となった。1929（昭和４）年８月の踊り開催日を前にして，商工会議所は徳島市をはじめ鉄道・船会社，料理業組合，芸妓らを管理する検番，マスコミ，警察などの関係者を招集し，盆踊り振興策を協議した結果，「踊り子奨励方法」として市内２ヶ所に賞品授与所を設置し，審査の上で賞品を授与することなどを決めた。

また，県外観光客の誘引策に力を入れ，「鉄道，汽船運賃の割引，旅館の勉強等」を要請し，「民家の店先，二階等を出来るだけ開放して観客の便宜をはかる」ように要望することになった。さらに「中央放送局へ委嘱して踊り当日の五日前位に盆踊りに関する放送を依頼する等あらゆる宣伝を尽くす」ことを決めている。「徳島盆踊り」から「阿波おどり」という呼称が定着した時期も昭和の初期と見られるが，これは，観光資源として全国に広めていこうという積極的な動きの一つであったと考えられる。

1932（昭和７）年６月，商工会議所をはじめ船会社や飲食・旅館組合，検番など観光関連団体を糾合し，会長に会議所会頭，副会長には市助役を充てた徳島観光協会を創設し，実務を徳島市と商工会議所の職員が担う体制が構築された。1933（昭和８）年には，阿波国共同汽船が阪神方面からの観光客に対して便宜をはかる臨時の「阿波踊見物船」を出した。各検番の芸妓300名余りも動員され，「県外への宣伝も素晴らしく徹底」したため県外から４千人以上の見物客を集めた。四百数十組の「踊りの群は繁華街に洪水の如く繰込み踊る阿呆に見る阿呆で大雑踏」を呈したのである。

1941（昭和16）年に封切られた東宝映画『阿波の踊子』（監督：マキノ正博，主演：長谷川一夫）では，徳島市での阿波おどりのシーンに芸妓たちがエキストラの踊り手として多数参加して，大々的なロケが行われた。同作が上映された市内の映画館は観客であふれたという。

１-３　戦後の歩み

第二次世界大戦中，中断を余儀なくされていた阿波おどりは，敗戦後の1946（昭和21）年には早くも復活する。同年，現在の「有名連」である娯茶平（ごじゃへい），天水（てんすい）連などが結成され，意気消沈の市民に活力を吹き入れるために市民の踊りを復活することになったのである。同年の踊りの運営主体となったのは徳島県国際親善協会であった。翌47年には徳島商工会議所，徳島市商店街連盟および徳島放送局が共催者となった。

1949（昭和24）年には，８月８日からの三日間と，９月６日，７日の二日間，元町のロータリーを利用して，初めて審査場桟敷ができた。1950（昭和25）年には，昭和天皇が県内を巡幸，３月26日に阿波おどりを見物された。大正14年結成ののんき連をはじめ，藤本連（のち蜂須賀連に改名）や天水連，娯茶平なども天覧の栄に浴した。今日の名だたる連の大半が，このころまでに結成された。1951（昭和26）年，徳島市などが百万円の巨費をかけ，元町と両国のロータリーを結ぶ八百屋町の両側に三千人収容の有料マンモス桟敷（さじき）を設置し，県，市，観光協会などが中心となり県外や海外への宣伝活動を推進した。

当時の大衆娯楽の花形といえば映画であり，1957（昭和32）年公開の松竹映画「集金旅行」で阿波おどりが取り上げられた。丸新デパート横に踊り本番と見間違えるほどの桟敷を組み，阿呆連や娯茶平に交じって岡田茉莉子や花菱アチャコらが踊った。最も大きな宣伝効果を発揮したのは，NHK徳島放送局をはじめ地元民放の四国放送や大阪の民放局などによるテレビ放映であったと言えよう。とくに，踊りの形態に大きな変化をもたらしたのが，1964（昭和39）年から始まる「前夜祭」と1966（昭和41）年からの「選抜阿波おどり大会」の開催であった。舞台での踊りは，照明効果やフォーメーション，キメのポーズ，動と静の動きに技巧を凝らすなど，さまざまな演出が加えられた。その影響で全体的に有名連の踊りは，より集団的なパフォーマンスを高め，連としての個性を追究するものへと変化していった。

1977（昭和52）年から「にわか連」がスタートし，観光客や見物人が自由に飛び込みで参加し，有名連の踊り子や鳴り物が応援に入り，演舞場に踊り込む形が生まれた。また，無料で入場できる演舞場が市内数カ所に設営され，さらに「街角踊り」「輪踊り」などが各所で行なわれ，交通規制された市内中心部のエリア全域が巨大な踊り空間となることで，観光客に新たな魅力を提供するようになった。

１-４　阿波おどりの全国各地への波及

徳島の地域芸能の観光資源化を体現して拡大・発展を遂げてきた阿波おどりは，全国各地へ伝播していった。首都圏で最初の阿波おどりは高円寺で，

1957（昭和32）年に東京高円寺商店街の青年部が発足記念として，「高円寺ばか踊り」という名称でスタートした。その後，1960～70年代には関東で50ヶ所余りに伝播・拡大した。阿波おどりを導入した多くの街が期待したのが「商店街振興」や「地域活性化」であり，そこに賑わいをつくり出すことであった。「東京高円寺阿波おどり」は半世紀を経て，3日間で１万人の踊り子と見物客100万人以上を集める巨大な祭りに成長していった。首都圏で開催される「東京高円寺阿波おどり」と「南越谷阿波踊り」は，「徳島市阿波おどり」とともに日本三大阿波おどりに数えられる。

阿波おどりは，さまざまな楽器や衣裳や多様な芸能の要素を取り入れて絶えず変化を遂げてきた。その特質と魅力は，一言で言えば自由自在な踊りそのものにある。2拍子の単純なリズム，簡単な振り付けを連続することで「舞踏表現」が成立しており，老若男女が参加しやすい。踊りの単純さと緩急の変化を併せ持ち，バリエーションの豊かさや踊り子の技能が発揮される柔軟で高い可変性を持ち，それゆえに「極める」のが難しく，踊りに魅せられるとのめり込む奥深さもある。なかでも早いテンポと浮き立つような軽快なリズムは，都市住民の感性にもマッチしている。また，盆踊りでありながら輪踊りに限らず前進する行進型として発展してきたため，広場を持たない都市の商店街の路上で踊れることで商店会（街）によってイベントの主役として選択された。「伝統性の強い民衆的な踊りのなかで，最も現代的な祝祭性に合致した形式をもつものの一つ」と評価され，1980年代には東日本を中心にして約80ヶ所にまで拡大した。また，この頃，阿波おどりはバブル経済の追い風で企業連も急増した。

1-5　阿波おどりの海外への伝播

テレビ中継が盛んになるにつれ，踊りに魅せられ，各界から多くの有名人が訪れるようになった。1960年代当時人気絶頂の勝新太郎夫妻や長門裕之夫妻，駐日フランス大使やポルトガル大使夫妻らVIPクラスの見物客が増える一方，阿波おどりの海外遠征もスタートする。まず1968（昭和43）年に徳島新聞社，四国放送の明治百年記念事業として，35人の阿波民芸団がハワイ・ホノルル市内で開催された日本人移民百年祭で海外初乱舞を披露し，その熱狂ぶりがテレビ中継された。以来カナダ，フランス，オランダから地球の反対側のブラジルまで，阿波おどりは世界各地を訪問した。

阿波おどりの海外へのプロモーションは県が担い，受入整備は市が受け持つという役割分担が明確に分かれていて，県は海外でのイベントに呼ばれるケースなどで阿波おどりの海外派遣事業も行っている。また，民間の連が自主的に海外に渡り，阿波おどりの知名度を上げるという動きもある。1995（平成７）年に徳島県出身の連長が主宰して東京都で発足し，2012（平成24）年に法人化した日本唯一のプロ阿波おどりパフォーマンス集団である「寶船」は，2014（平成26）年にインド・フランス・ニューヨーク・香港と４ヶ国の世界ツアーを実現して以来，これまでに世界14ヶ国47都市で公演を行い，年間約300ステージをこなしている。

世界各地でも日系人などによって阿波おどりの連が誕生しており，アメリカではサンフランシスコ阿波っ子連，ニューヨーク連，シカゴの美湖（みこ）連，ロサンゼルスの南加徳島県人会青空連，フランスではパリの繋（つながり）連，そしてブラジルではレプレーザ連といった海外の連が活発に活動している。これら海外連の代表が2019（令和１）年11月に徳島県が主催した「世界阿波おどりサミット」で意見交換する機会があり，今後の交流や連携に向けたネットワークを構築し始めている。

1-6　本場徳島市の阿波おどり

徳島市の阿波おどりは，毎年８月12日から15日まで徳島市中心部で開催される夏の盆踊りである。三味線，大太鼓，鉦，篠笛，締め太鼓などの鳴り物の2拍子の伴奏にのって連（れん）と呼ばれる踊り手の集団が演舞場で行進するほか，自動車の通行を禁止して歩行者天国となった中心部を踊り歩く。

阿波おどりの音楽は「えらいやっちゃ，えらいやっちゃ，ヨイヨイヨイヨイ，踊る阿呆（あほう）に見る阿呆，同じ阿呆なら踊らな損々…」と唄われる「よしこの」のリズムで知られる。「よしこの」の唄がなくても，「ヤットサー，ヤットサー」という掛け

声や「ヤットサァー」という長い掛け声に「ヤット，ヤット」と呼応しながら踊るパターンが多用されている。

徳島市観光課内に事務局を置く阿波おどり振興協会に所属する16連，（社）徳島新聞社地域振興部内に事務局を置く徳島県阿波踊り協会に所属する19連，そして徳島県阿波おどり保存協会に所属する９連は，有名連と呼ばれ，連員の人数や踊り，鳴り物の技量といった面で体裁がより整っている連である。

徳島県の商工労働観光部が毎年「阿波おどり期間中の人出状況」を発表しており，そこから徳島市阿波おどりの実施結果のデータを時系列で見てみると，2009（平成21）年の徳島市阿波おどりの人出総数は136万人で，その内県外客は73万人，踊り連数は980だった。しかし，その後は減少が続いて，2014（平成26）年の人出総数は114万人で，県外客が56万人まで減った。その翌年から少し盛り返し，2016（平成28）年の人出総数は123万人，県外客は60万人となったものの，踊り連数の減少は止まらず850となった。

１-７　阿波おどり事業の運営方法について

1971（昭和46）年に社団法人として設立され，2014（平成26）年に公益社団法人となった徳島市観光協会は，2017（平成29）年度まで徳島新聞社とともに阿波おどりを主催してきた。しかしながら，阿波おどり事業会計における約４億円に上る累積赤字が問題化し，2018（平成30）年３月に同協会の破産手続きの開始決定に至った。2018年の阿波おどりは，徳島市長と徳島県商工会議所連合会など７団体の代表による８名体制の阿波おどり実行委員会が主催することになった。全体の入場料収入を増やすために観客の人気が一ヶ所に集中してしまう南内町演舞場での総踊りを中止し，四つの演舞場に踊り手や観客を分散させる演出を導入した。しかし，この南内町演舞場での総踊りの中止決定をめぐる騒動の影響もあり，観光客などの人出は前年比15万人減の108万人と近年では悪天候を除いて過去最低を記録し，事業も約2900万円の赤字となった。

2019（平成31・令和１）年からの５年間は，事業規模約３億円の阿波おどりの運営を民間企業の共同事業体に委託する形をとって新たに臨んだが，阿波おどり期間後半の２日間が台風に見舞われて中止となったことが大きく影響し，共同事業体による１年目の事業は１億1300万円の大幅赤字を計上した。2020（令和２）年も各演舞場の運営やチケット販売方法などに新たな企画を試みながら準備を進めたが，同年１月ごろから発生した新型コロナウイルス問題が長期化する中，夏の阿波おどりは戦後初めてとなる中止が４月下旬に決定された。その間，４月上旬に行われた選挙の結果，徳島市長は１期４年務めた遠藤彰良市長（64）から内藤佐和子新市長（36）へと交代した。

新型コロナウイルスの感染に収束の見通しが立たない状況が続く中で，共同事業体による運営３年目となる2021年夏の阿波おどりを「With コロナ時代」の感染症対策を万全にして開催するための実験として，阿波おどり団体の協力を得て2020（令和２）年11年21日（土）および22日（日）に藍場浜公園で「阿波おどりネクストモデル構築事業」を開催した。この事業の目的は「2021阿波おどり事業計画の策定に向けて感染症対策のあり方について検証し，新型コロナウイルス感染症に対応した阿波おどりの新たなモデルを構築することで，Withコロナ時代の旅行ニーズに応じた観光誘客へとつなげる」ことであり，阿波おどり実行委員会（事務局：徳島市経済部観光課）が主催し，徳島市，徳島県も参画した３者共催イベントとして実施したものである。

民間３社共同事業体への運営業務委託については，以前の徳島市観光協会主催の事業で赤字を徳島市が補填することになっていたために累積赤字が膨らんだことへの反省から，事業で赤字が出ても徳島市が補填しない契約内容になっている。しかしながら，2020（令和２）年の夏の阿波おどりが新型コロナウイルスの影響で中止することになったことをふまえて，事業体は同年夏の阿波おどりの準備にかかった経費負担などについて，入場券収入などが見込めなくなり，回収の見込みが立たなくなったため，実行委員会に協議を提案していた。これに対して，2021（令和３）年１月になって経費負担には応じられないばかりか，事業体からの固定納付金500万円

を支払うよう要請する意向が実行委員会事務局から示されたため，今後は事業体が代理人を立てて実行委員会と直接協議する場を求めるという問題に発展している。阿波おどりをめぐる対立や騒動が再燃する恐れも出てきた。

Ⅱ　よさこい祭りについて

2-1　よさこい祭りの由来

高知市のよさこい祭りは[1]，毎年８月９日から12日まで開催される。当日は，高知市内各所にてよさこい鳴子踊りが披露される。近年の参加チーム数は，約200団体弱で推移している（図１）。

よさこい祭りが毎年日程を固定している理由は，過去の天気予報から最も雨の確率の低い日であるためと言われている。また，高知市における８月の最高気温の平均は，31.9℃[2]である。実際，この気温から来るイメージ以上の厳しい暑さと湿気を体感する。そのため，昔から「夏枯れ現象」と呼ばれる商店街に閑古鳥が鳴く状況があった。そこで，８月にお祭りを開催することで，商店街を活気づける目的も併せもつのである。

よさこい祭り誕生のきっかけは，「地域の発展なくして商工業の発展なし」[3]という理念のもと，高知市商工会議所が地震[4]の打撃と不況からなかなか脱出できない状況に街全体が活気づくような企画として考え出された。そして，隣県である徳島市で盛大に開催されている阿波おどりを参考に，1953（昭和28）年，鳴子踊りの原型が生まれ，翌（昭和29）年，お座敷踊りから発展した新しい踊りとして第１回よさこい祭りが始まった（図２）。ここで，第１回に参加した踊り子隊のうち約８割が商工関係であった。これは，市街地振興と地域の人々の楽しみに一役買うという市民のためのお祭りとして位置づけられたためである。

よさこい祭りの運営は，よさこい祭り振興会，各競演場・演舞場（商店街，町内会），公益社団法人高知市観光協会の３者による組織形態で営まれる。しかし，この３者それぞれが，独立して役割をもつ。例えば，９日（前夜祭，花火大会）前夜祭はよさこい祭り振興会，花火大会は高知市観光協会，10日，11日（競演場，演舞場）は各商店街と町内会，12日（よさこい全国大会，後夜祭）よさこい全国大会は高知市観光協会，後夜祭はよさこい祭振興会が運営を執り行う。

2-2　よさこい鳴子踊りの決まり事

よさこい鳴子踊りには絶対の決まり事として，①鳴子を手に持って前進する踊りの振付けを基本とする，②曲中によさこい節のメロディを入れる，③地方車（じかたしゃ）は１台用意する，という三つがある。なので，これ以外の踊りに関する曲調，振付，衣装などについては自由に創り上げることができる。すなわち，手に鳴子を持って踊るという緩やかな枠組みでお祭りをまとめている。言い換えれば，サンバ，ロック，ジャズ，ヒップホップなどの曲調であっても，鳴子を持って踊ればそれはよさこい鳴子踊りと言える。

2-3　基礎用語

⑴よさこい節

よさこい節とは，高知の芸妓さんによるお座敷唄の一つを言う。その歴史は，江戸時代からと言われ

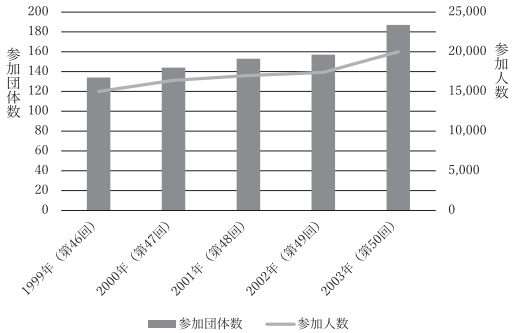

図１　よさこい祭りの参加人数と参加団体数の推移
（出典）『よさこい祭り50年』より作成。

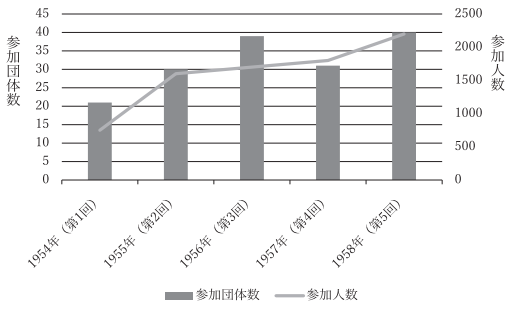

図２　よさこい祭り誕生時の参加人数と参加団体数
（出典）『よさこい祭り50年』より作成。

ている。武政栄策がよさこい節とわらべ唄をアレンジしてよさこい鳴子踊りの歌を作った。

⑵正調

正調とは，よさこい鳴子踊りの誕生の際に作られた基本に忠実なスタイルである。正調とされる踊りは，花柳，若柳，坂東，山村，藤間の日舞５流各派の舞踊家が知恵を出し合って作られた。

従来，よさこいと言えばこの正調を意味していたが，近年は，どんどん変わり続ける様々な踊りや音楽と一線を画し，他と区別するための呼称として正調を使う。

⑶鳴子

鳴子は，もともとは田んぼで吊るされていた雀除けである。作曲家の武政英策（1907～82年）の発案で二期作の高知だから両手に鳴子をもって踊ってはどうかという意見から，よさこい祭り誕生の際，踊り専用に手に持てるよう改良されてできた。

⑷地方車

地方車とは，踊り子の先頭を走りチームの顔となる車である。地方車を先頭に前進しながら踊ってこそ初めてよさこい鳴子踊りと言える。これは，他のチームとの共有や貸し出しはできない。必ず各チーム１台用意することになる。審査では，地方車奨励賞[5]というものがあるので，地方車の作成もチームの重要かつよさこい祭りを楽しむ要素の一つである。

チームは，地方車に思いを込めて作っている。そのため，チームの顔，看板，シンボルとなり得る。お祭りでいう神輿にあたる。チームの個性に合わせたデザイン，協賛，寄せ書き，絵，立体的オブジェ，など自由に造られる。

⑸メダル

メダルとは，各競演場・演舞場で個人賞として踊り子に掛けられるものである。審査基準は特になく，審査員の好みである。しかし，追手筋本部競演場でしか貰えない花メダルは，踊り子の中でもずばぬけて上手くないと頂けないので高嶺の花となる。

⑹競演場・演舞場

競演場・演舞場とは，よさこい鳴子踊りを披露する場所を言う。この二つの場所は，賞の審査会場を競演場と呼び，審査を行わない会場を演舞場と呼ぶ違いがある。高知市内に９ヶ所の競演場と７ヶ所の演舞場が本祭では開かれる。

⑺衣装

衣装は，チームを作るうえで地方車と並び気を遣うことの一つである。衣装は，踊り子のモチベーションに直結していて，なおかつ，審査の対象になる重要アイテムである。さらには，翌年の踊り子募集にまで影響する。

また，踊り子の募集要項に髪型という項目がある。踊り子の趣向によって，チームの全体美を追求するチームを選ぶのか，個性を発揮できるチームで踊るのか選択することになる。この髪型を気にすることから，「よさこい祭りが女性のお祭りという証」[6]という側面がある。とにかく，各チーム多種多様で細かく規定をしないチームも多くなっている。

2-4　全国への広がり

今日，全国各地約200ヶ所以上で何らかの形でよさこい祭りが行われている。実際，よさこい祭りに関する定義を確定させることができていないので，よさこいを披露する催しをよさこい祭りとして捉えてみても，実数を正確に把握するのが困難なほど日本各地で多種多様な形としてよさこい鳴子踊りは披露されている。

高知県内以外で行われるよさこい祭りの先駆けとしては，1992（平成４）年のYOSAKOIソーラン祭りがある。その後，2007（平成19）年頃まで全国的に浸透していった。従来からの地域の歴史や生活と深く結びついたお祭り文化ではなく，新たに興ったお祭りとして全国各地でよさこいを披露する催しが受け入れられていった。

この全国への飛び火以前から世界へもよさこいは進出しており，1972（昭和47）年フランス，1982（昭和57）年中国，1988（昭和63）年ドイツなど，徳島の阿波おどりと同じく世界各地21の国や地域にまで広がり世界的なネットワークを構築している。

戦後生まれのよさこい祭りは，市民参加型の祭り，地域活性化の催し，元気になりたい人々などに求められ，「一人一人の踊り子にとっては，自分が主役になれる踊り，仲間とつくりあげる踊りに魅力を感

じ」[7]，参加型の進化する祭りとして年々スタイルを変更している。そこで，よさこいに関する催しが増殖する様子から「よさこいウィルス」[8] という言葉ができるほどである。

2-5　本場高知市のよさこい祭り

コロナ禍により2020年（第67回）よさこい祭りも全国の他のお祭りと同様に中止となった。よさこい祭りは高知県への経済波及効果として約96億円超と試算されている。なので，中止によるよさこい祭り関係者への経済的な影響は，昨今のコロナ禍と合わせて相当なものと言える。

本場高知市のよさこい祭りはお祭りと銘打っているが，「神様がいません。鳴子踊りはどこかの神様に奉納するものではなく純粋に自分たちの楽しみのために踊っているいわば市民が主役のお祭り」[9] として成り立っている。伝統のお座敷踊りであったよさこい踊りから，新しい時代の誰でも楽しめる踊りへの志向と，阿波おどりに負けないような新しい踊りの創造から誕生したのである。

踊り自体も創作者の武政英策自身が，よさこい踊りに手を加えることを大衆が支える民俗芸能として肯定的に評価していたこともあり，各チームにおいてそれぞれに創意工夫を凝らしながらよさこい踊りを創り上げている。すなわち，完成形がなく，毎年毎年，変化を続けるお祭りになっている。

そのため，高知市のよさこい祭りは県外観光客を想定したイベントというよりも，地元の人間が楽しむ祭りの要素が強かったために，地場産品などを用いたお祭りの盛り上げは特段考えられていない。これが，他地域で行われる交流ありきで始まったよさこいを用いた催しと本場高知市の独自進化型のよさこい祭りの違いである。

しかし，近年，高知のよさこい祭りにおいても過度なコンテスト化によって，よさこい鳴子踊りの持つ形式にとらわれず自由で多様な踊りではなく，画一的，形式的な踊りが増えつつある。そのため，よさこい祭りの魅力が薄れてきていると言われるようになった。

よさこい祭りは，お祭りとしての「固定化・様式化」[10] を拒み，「単なる都市の祝祭レベルではなく，祭りとしてはきわめて特異な進化を経て」[11] これほどの規模に育ってきた。今なお，常に「変容・進化」[12] を遂げている最中である。今一度，よさこいお祭りは皆で楽しむという本来の目的を再認識することで，これからもよさこい祭りが継承されていくことになる。

Ⅲ　まとめ　二つの祭りの共通点と相違点

ここまで述べてきたように，阿波おどりは「連」，よさこい祭りは「チーム」を単位に，演舞場などの晴れ舞台を踊りながら行進する四国の夏の風物詩である。どちらの踊りも見るもよし，参加するもよし，ということで，初心者にとっては入門しやすく，仲間とともに普段から努力した練習の成果を披露するハレの舞台が用意されていて，場が盛り上がることもあって，国内外の各地に広まっている。これらの踊りが行われる祭りは，もともと民衆の自由で自主的な参加によって成り立つものであるが，実際は，大勢の観光客や見学者用の会場設営など興行としての性格を伴い，主催者が祭りの事業運営を担うことになる。近年の阿波おどりは，主催団体の累積赤字問題をきっかけに，運営体制の見直しと事業を黒字化するための一連の試みの動きに注目が集まっている。さらに新型コロナウイルス問題でイベント中止に追い込まれ，事業主体が開催に向けて負担した経費を回収できる見込みが立たなくなったことで事業会計の問題がより顕在化することになった。

筆者らは，阿波おどりとよさこい祭りを事業運営の視点から比較検討することによって新たな知見を得られないか，と考え，まず今回は，これら二つの祭りの特徴や共通点，相違点を検討し，締めくくりとして表１のようにまとめてみた。

謝辞

本研究の内容は，四国大学学際融合研究所での研究活動の成果として得られたものである。本報告は，同研究所経営情報研究部門の地域科学研究部会における令和２年度特別研究「阿波おどりとよさこい祭りの比較研究」の第１報である。

表１　阿波おどりとよさこい祭りの特徴および実施概要

	阿波おどり	よさこい祭り
起源と歴史	藍業を中心とした地域の経済力が存立基盤となり，その後は官民一体となって戦前戦後を通して，庶民の盆踊りを観光誘客の阿波おどりに発展させてきた。「手を挙げて足を運べば阿波踊り」と初心者にも親しみやすい一方，極めるには奥が深く，国内外各地に広まっている。	戦後に徳島の阿波おどりを参考に，街を活気づけるために，田んぼで吊るされていた雀除けの鳴子を手に持ってお座敷唄のよさこい節で踊るよさこい祭りが創作され，創意工夫が続いている。よさこいソーランは若者を中心に国内外各地に広まっている。
開催期	徳島市で毎年８月11日に「前夜祭」，12日から15日の４日間に昼間に「選抜阿波おどり」と夕方から「阿波おどり」が行われる。	高知市で毎年８月９日から12日までの４日間で，９日に「前夜祭」，10日と11日に「よさこい祭り本番」，12日に「全国大会・後夜祭」が行われる。
会場	徳島市内に有料の４ヶ所の演舞場を含む13の踊り会場がある。ホールなどの舞台での演技もある。	高知市内に９ヶ所の競演場（賞の審査会場）と７ヶ所の演舞場（審査なし）がある。
参加単位	揃いの衣装を着た鳴物と踊り手（男踊りと女踊り）で構成される連がよしこの節の音楽や２拍子のぞめきのリズムに合わせて会場を前進する。舞台での踊りや輪踊りなどもある。	揃いの衣装を着たチームが両手に鳴子を持って必ずよさこい節のメロディを含む音楽に合わせて踊りながら前進する。踊り子の先頭を走りチームの顔となる地方車がある。
コンテスト審査	かつては審査があったが，現在は基本的になし。	審査のある会場と審査のない会場がある。
運営組織	決定機関として徳島市阿波おどり実行委員会があり，キョードー東京とネオビエントなど民間３社で構成される共同事業体に2019年から５年間事業運営を委託している。	よさこい祭り振興会，各競演場･演舞場（商店街，町内会），公益社団法人高知市観光協会の３者による組織形態で営まれ，この３者それぞれが，独立して役割をもつ。

〈註〉

１）よさこい鳴子踊りを行うお祭りをいう。

２）気象庁ウェブサイト　統計期間1981～2010年。

３）岡崎直温（2006）『よさこいはよさこいじゃき』p.22.

４）昭和南海地震。1946（昭和21）年潮岬南方沖を震源とする巨大地震。

５）よさこい大賞，金賞，銀賞，審査員特別賞，地区競演場連合会奨励賞，地区競演場連合会地方車奨励賞。

６）前掲）岡崎 p.85.

７）川竹大輔（2020）『よさこいは，なぜ全国に広がったのか～日本最大の交流する祭り～』p.51.

８）前掲）川竹 p.54.

９）前掲）岡崎 p.18.

10）岩井正浩（2006）『これが高知のよさこいだ！いごっそとハチキンたちの熱い夏』p.12.

11）前掲）岩井 p.12.

12）前掲）岩井 p.12.

【参考文献】

吉井藤重郎（1984）「阿波踊りの構造―コミュニティ・イベントの研究序説―」人文研究 36（11）

関口寛（2007）「昭和初期・徳島における観光産業振興と阿波踊り」『凌霄』14，四国大学

藍谷鋼一郎他（2012）「四都市における阿波踊りの比較から見た空間利用と運営方法の特徴と課題－徳島，高円寺，南越谷，大和をケーススタディとして－」都市計画論文集　第47巻第３号，日本都市計画学会

高橋晋一（2015）「阿波踊りの観光化と「企業連」の誕生」国立歴史民俗博物館研究報告第193集

佐藤正志（2019）「地域民間芸能の観光資源化と地域振興－阿波踊りの事例から－」経営情報研究第 26 巻第１・２号合併号，摂南大学経営学部

萩原八郎・稲井由美（2019）「ブラジルにおける阿波踊りの今日的な意味－レプレーザ連の来徳からの考察－」四国大学経営情報研究所年報第24号

南和秀他（2021）「阿波楽・新春特別号」猿楽社

井上昇（2003）「広がる高知の『よさこい祭り』（前編）」『地理』第48巻７号，古今書院

井上昇（2003）「広がる高知の『よさこい祭り』（後編）」『地理』第48巻９号，古今書院

岩井正浩（2006）『これが高知のよさこいだ！いごっ

そとハチキンたちの熱い夏』岩田書院
岡崎直温（2006）『よさこいはよさこいじゃき』イープレス出版
川竹大輔（2020）『よさこいは，なぜ全国に広がったのか～日本最大の交流する祭り～』リーブル出版
高知市広報（2020）『あかるいまち』NO.808
高知県人名事典新版刊行委員会（1999）『高知県人名事典新版』高知新聞社
矢島妙子（2015）『「よさこい系」祭りの都市民俗学』岩田書院
よさこい祭振興会（1973）『よさこい祭り20年』高知企業株式会社出版部
よさこい祭振興会（1994）『よさこい祭り40年』よさこい祭振興会
よさこい祭振興会（2004）『よさこい祭り50年』よさこい祭振興会

【ウェブサイト】

・阿波おどり：徳島市公式ウェブサイト https://www.city.tokushima.tokushima.jp/kankou/awaodori/（最終閲覧日：2021年１月16日）
・阿波おどり公式サイト（阿波おどり実行委員会HP）https://www.awaodori.tokushima.jp/（最終閲覧日：2021年１月16日）
・阿波おどり会館 https://awaodori-kaikan.jp/（最終閲覧日：2021年１月16日）
・徳島阿波踊り完全ガイド http://www.awaodori-guide.com/about/history.html（最終閲覧日：2021年１月16日）
・岡崎よさこい研究所 http://y-ken-b.cocolog-nifty.com/（最終閲覧日：2020年12月16日）
・公益社団法人高知市観光協会 https://welcome-kochi.jp/（最終閲覧日：2020 年12 月23日）
・高知市役所「観光情報　よさこい祭り」https://www.city.kochi.kochi.jp/site/kanko/yosakoimatsuri.html（最終閲覧日：2020年12月７日）
・南国土佐・高知よさこい祭り http://www.cciweb.or.jp/kochi/yosakoiweb/（最終閲覧日：2020年12月13日）
・よさこい文化協会 https://yosakoi-bunka.com/?fbclid=IwAR3YXsA5HPYy5rS9izQvk6L-Tf4PmaMC2qF8VaPWYGEie9ZNGCD8-ASIoro（最終閲覧日：2020年１月16日）
・第五管区海上保安本部海洋情報部「過去の地震調査報告等」https://www1.kaiho.mlit.go.jp/KAN5/siryouko/suiro-youhou/suiro-youhou.html（最終閲覧日：2020年12月13日）
・気象庁「平年値（年・月ごとの値）」http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/nml_sfc_ym.php?prec_no=74&block_no=47893（最終閲覧日：2020年12月13日）
・高知県商工会議所連合会「よさこい祭り受賞チーム　」http://www.cciweb.or.jp/kochi/yosakoiweb/award/jusyou60_65.pdf（最終閲覧日：2020年12月13日）
・よさこいイベント情報よいやさぁ http://yosakoi.yoiyasa.info/（最終閲覧日：2020年12月13日）
・こうちらいふ「よさこい移住プロジェクト」https://www.city.kochi.kochi.jp/kochi-life/top.html（最終閲覧日：2020年12月13日）

ABSTRACT

The length of the history of the Awa Odori Festival in Tokushima City and the Yosakoi Festival in Kochi City are very different, and the styles of dance are also different, but both have many things in common, such as having spread widely both in and outside Japan as well as being representative summer festivals of Shikoku. The Awa Odori Festival in Tokushima City has been in a difficult situation in terms of operation since the large cumulative deficit of the Tokushima City Tourism Association, which hosted the project, became a problem. The situation has become even more difficult with the new coronavirus problem. The Awa Odori Festival in Tokushima City has a great economic ripple effect on the local community. The move to maximize ticket revenue by sticking to the profitability of the business will eliminate the economically vulnerable, and it raises the question that it may be inconsistent with the purpose of the festival that ordinary people can freely enjoy. In response to these questions, the authors would like to make a comparative study with the Yosakoi Festival in Kochi, which is on a scale similar to the Awa Odori Festival in Tokushima but has a different management method. We decided to summarize the history and outline of the festivals and the characteristics, similarities, and differences between the two.

KEYWORDS: Awa Odori Festival, Yosakoi Festival, Typical Summer Event, Entertainment